

「アステカ帝国」の成立過程

——土着史料による試み——

小林 致 広

【要約】 一五一九年にコルテスの眼前に姿をみせた核^グアメリカの高文明社会は、一般に「アステカ帝国」と称されるようになっていく。アステカの政治体系、軍事主義、貢納体制などについての一般的叙述は膨大な量である。本稿は、それらの資料の中でコディセ（絵文書）と総称される土着民側の資料をもとに、アステカの「帝国」拡張の過程を究明しようとするものである。歴代諸王の事蹟、特に征服活動を記したコディセの一つであるコディセ・メンドシノを基本史料とし、アステカの征服活動を四期に区分した。テペネカの傭兵としての征服活動は、三都市同盟によるメヒコ盆地での覇権確立によって、自らの勢力の拡大に帝国形成のための征服活動へと転化する。支配階級である神官、貴族、戦士階級は、熱帯地域との交易によって抬頭しつつあった商人階級との利害の一致点を、熱帯地域の軍事的征服に見出した。こうしてモテクスマ一世、アジャヤカトルの二代において、中央高原から熱帯地域への進出の橋頭堡が確保される。それらの地方には、統治者が派遣され貢納の徴収と治安維持にあたった。この第三期の征服活動は古くからの交易の仲継地などの掌握を期したものが、第四期はそれらの交易品の内の貴重品——カカオ、金、宝石、羽毛——の生産地の直接支配を目指すものであった。こうして一四八〇年代から約四〇年の間に「アステカ帝国」は大拡張する。しかし、交通手段の未発達では首都から三〇〇km以上もある遠隔地の統治支配を旧来の統治者派遣から軍事的要塞の設置へと変えた。それは、制圧した地方の旧領主の有していた政治的領域支配を改変することなく、軍事力を背景に受け継ぐとするものであった。このため遠隔地方では各ブエプロはメヒカに服属してはいるが相互に紛争を起すという一種の無政府状況が生まれつつあった。そして、その克服・統一は、メヒカの手による「アステカ帝国」の完成によってではなく、その破壊者コルテスによって成された。

小林 五八巻二号 一九七五年三月

一 はじめに

「アステカ帝国」は「想像上の小説」である。一九世紀の偉大な人類学者モルガン Lewis H. Morgan は、このように断言した^①。アステカという名称は、一八世紀末までは使われることはなかった^②。そして、それはプレスコット William H. Prescott の傑作『メキシコ征服記』^③によって、決定的に定着した言葉となったのである。たしかに「アステカ帝国」を最初に記述したコルテス、ゴマラ、ディアスなどの征服者の証言は、驚嘆のイメーτζで満ちている。その記述は、物質的文化についてはさておき、「社会と政府、社会関係および生活様式については、何事にまれ無価値である」とモルガンは断言している。はたして、そうであろうか。

コルテスは、国王カルロス五世の所有するところとなったドイツにも匹敵する価値を、クルア Culúa と呼ばれる広大で豊かな土地に見出し、「太平洋の新スペイン」la nueva españa de la mar océano と命名した^④。この土地を支配していたのがモテクスマ Moteczuma である。その勢力は首都 Timixtitan (= Tenochtitlan) から二〇〇リーグアス(約千 km)に達する地方までに及んでいた。その統治支配をコルテスは次のように第二書簡で記した。

「この地域、特に首都隣接地域の多くの領主は、既述のごとくこの大都市に居住し、そのすべて、あるいは大部分がモテクスマに奉仕し、その領主権を相統保持している。……これら諸領主の領土すべてに駐屯所が置かれ、そこに家臣を行政官あるいは各地方が納める労働奉仕と貢納の徴発担当官として配備している。……そして、各地方が納める貢納品目とその量についての規定を絵文字と数字で紙に記載している。」^⑤

ここにみられるのは、軍事的民主制という珍妙な部族連合体を越えた政治的集権化をみた社会であろう。行政官派遣、租税台帳の整備にみられる一定の貢納体系の存在、こうしたものは決して想像上の産物ではない。コルテスが言及している貢納の記録を含め多くの公文書を作成・保管している建物 Amoxcalli とその長官についてディアスも語っている^⑥。

Ito loca, Xinhāmātl といわれる伝承、年代記、あるいは貢納記録などのコディセは、焚書などによって失なわれたものが多い。しかし、初代副王メンドサの指示によって一五四一—二二〇年頃に筆写された一群の絵文書コディセ・メンドシノを始め、いくつかのコディセが残されている。

こうした土着史料の検討は追放イェズ会士クラビエロによって着手され、フィロロジストによる史料集積を経て、メヒコ革命後、インディヘニスモを基調とした研究が着手された。^⑪

本稿は、こうした土着史料を中心^⑫に、コルテスら征服者の眼前に展開した新スペインの土着インディオの世界、特に「アステカ帝国」と称されるに至ったクルア・メヒカ Culhua-Mexica^⑬の支配領域の広がりを探ろうとするものである。

① L・H・モルガン、荒畑寒村訳『古代社会』上巻、東京、一九五四
年、二二〇頁。

② アステカ Azteca とは伝説上の故地アストラン Aztlan から来た人
という意味で、チャルカ Chalca によってつけられた侮称である。
自称は伝説上の領主になんで「メヒカ México」あるいはテノチカ
Tenochca である。コルワカンの貴族を王に引き連れてからは「コル
ワメヒカ Culhua México」と称した。コディセ・フウビン、チャル
パインの年代記においてアステカという名称が使用されているが、い
ずれもメヒコ盆地居住前の時期に関連した事件に限定されている。メ
ヒカからアステカに呼称が再帰したのは、クマビヘロ以降のメヒコ研
究の進展においてであり、一九世紀初期には「フンボルトにみられる
ように後者がより好まれて使用され始めた」。

Wolf, Eric R., *Sons of the Shaking Earth—The People of Mexico
and Guatemala—Their Land, History and Culture*, Chicago, 1959,
p. 136.

Humboldt, Alejandro de, *Ensayo Político sobre el Reino de la*

Nueva España, México, 1973.

アストランの位置については諸説あり、アジア大陸という珍説まであ
るが、一応現ミチョアカン州、グアナフアト州にまたがるユリリア地
方の湖水地方と考えられている。

Clavijero, Francisco Javier, *Historia Antigua de México*, México,
1971, pp. 66—67.

Seler, Eduard, “Wo lag Aztlan, die Heimath der Azteken?”
*Gesammelte Abhandlungen zur Amerikanischen Sprach und Al-
tertumskunde*, Bd. II, Graz, 1960, S. 31—48.

Kirchhoff, Paul, “¿Se puede localizer Aztlan?” *Anuario His-
torico*, año 1 (1961), pp. 59—73.

③ Prescott, William, *The History of the Conquest of Mexico*, (1st
ed. New York, 1843) Chicago, 1966.

④ 本誌の Don Enrique de Vedia (ed.), *Historiadores Primitivos
de Indias*. 2 Tomos. Biblioteca de Autores Españoles (B. A. E.
—), Tomo 22, 26, Madrid, 1946—47, 所収の版を利用。

- Cortés, Fernando, "Cartas de Relaciones" B. A. E. Tomo 22, pp. 1-153.
- López de Gómara, Francisco, "Conquistista de México", B. A. E. Tomo 22, pp. 295-455.
- Díaz del Castillo, Bernal, "Verdadera Historia de los Sucesos de las Conquista de la Nueva España" B. A. E. Tomo 26, pp. 1-317.
- ⑨ ヤマナハ 前掲 三三八頁 註 1。
- ⑩ Cortés, op. cit., p. 52.
- ⑪ Ibid., p. 34.
- ⑫ Díaz del Castillo, op. cit., pp. 87, 201.
- ⑬ 本誌に於てのナホヤ使用
- A: "Codice Mendocino".- Purchas, Samuel, *Hakluytus Posthumus, or Purchas His Pilgrimes*, Glasgow, 1906, vol. XV, pp. 412-504.
- B: "Codice Chimalpopoca".- Lehmann, Walter, *Die Geschichte der Königreiche von Colhuacan und Mexico*, Stuttgart, u. Berlin, 1938.
- C: "Codice Aubin".- Dibble, Charles E. (ed.), *Historia de la Nación Mexicana, Codice de 1576*, Madrid, 1963.
- D: "Codice Florentine".- Dibble, Charles and Arthur J. O. Anderson, *Florentine Codex; General History of the Things of New Spain*, Santa Fe, 1950-
- ⑭ 註 12 ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ⑮ Clavijero, op. cit.
- ⑯ Selser, op. cit., 5 Bds. Graz, 1960-61.
- Izabalzeta, Joaquín G., "Colección de documentos para la historia de México", 2 vols., México, 1858-66. (C. D. H. M. ㉞) y "Nueva Colección de documentos para la historia de México", 5 vols., México, 1886-92. (N. C. D. H. M. ㉞)
- ⑰ ヤナハ ヲ イヒスヤザ 眞鍮ナシメナリキヲイヒスヤノ 眞鍮ナシメナリキヲイヒスヤノ
- ⑱ León-Portilla, Miguel, *Los Antiguos Mexicanos*, México, 1974, pp. 9-14.
- Caso, Alfonso (ed.), *Mejados y Resultados de la Política Indígena en México*, México, 1954.
- ⑲ 本誌に於てのナホヤ使用
- A: "Historia de los Mexicanos por sus pinturas".- Garibay K, Angel Ma., *Teogomía e Historia de los Mexicanos, tres opúsculos del siglo XVI*, México 1973, pp. 23-66.
- B: Muñoz Camargo, Diego, *Historia de Tlaxcala*, Guadalajara, 1972.
- C: Chimalpahin Cuauhtlehuanitzin, San Antón Muñoz, *Relaciones originales de Chalco Amaguecanean*, México, 1965.
- D: Duran, Fray Diego, *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme*, 2 vols., México, 1967
- E: Sahagún, Fray Bernardino de, *Historia general de las Costas de Nueva España*, 4 vols., México, 1969.
- ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉓ 後者はチャノロの系統を受け継いでいる。㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉔ 最も偉大な歴史家 民族誌学者 完全な古史資料 ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉕ メソコ文化のコンチヤノに忠実である。㉖ 画者の位置づけに因って ㉗ M・ジョーン・サラスのインペラーチノ村江四郎訳『インペラーチノ文化史』東京一九七三年 九四一九六頁 参照。

⑭ ナワトル語(アステカの公用語)で、¹⁰⁰は場所を指す接尾辞、¹⁰¹は人々を意味する接尾辞である。メヒカとはメヒコ(テノチティトラ

ンリトラテロルコ)に本拠をかまえる部族をさす。

二 メヒコ盆地における三都市同盟の覇権

ロディセ・メンドシノ第一部^①(folio 1-18)は、アストラン Aztlan を出発したメヒカ Mexico の本拠テノチティラン Tenochtitlan の創設から、スペイン人到来時までのメヒカ歴代領主の征服活動の事蹟を記載している。アカマピチトリ Acamapichtli (在位一三七六—九五)からモテスマ二世 Moteczuma (Xocoyotzin)^②(在位一五〇三—一二〇)の九代、約一五〇年間にメヒカによって征服されたプエブロ二一五を記載している。この原本は不明であるが、Tlaltocamatlといわれる王統記の一つであろう。メヒカの征服活動の記録としては、ロディセ・チャルボボカ Codice Chimalpopoca などいくつかの史料がある。

ロディセ・メンドシノ第一部(以下「征服記」と略)におけるメヒカの征服活動は、次のように四期に区分しうる。

(一)アカマピチトリ、ウィチリウィトル Huitzilhuitl (在位一三九六—一四一七)、チャルボボカ Chimalpopoca (在位一四一八—一二七)の三代にわたるテパネカ Tepaneca の専制君主テソモク Tezomoc (一三四六—一四二六)の傭兵としての征服活動。

(二)テパネカの軛からの脱出と三都市同盟によるメヒコ盆地内のプエブロの征服。イッコアトル Itzcoatl (在位一四二七—四〇)の一代ではば完了。

(三)「熱帯地域」Tierra Caliente への進出。モテクス一世 Huehue Moteczuma (在位一四四一—一四六九)、アシャヤカル Axayacatl (在位一四六九—一八二)およびティソク Tizoc (在位一四八一—一四八六)の三代で、中央高原 Mesa Central の制圧と熱帯地域への遠征とその拠点の確保が行なわれる。

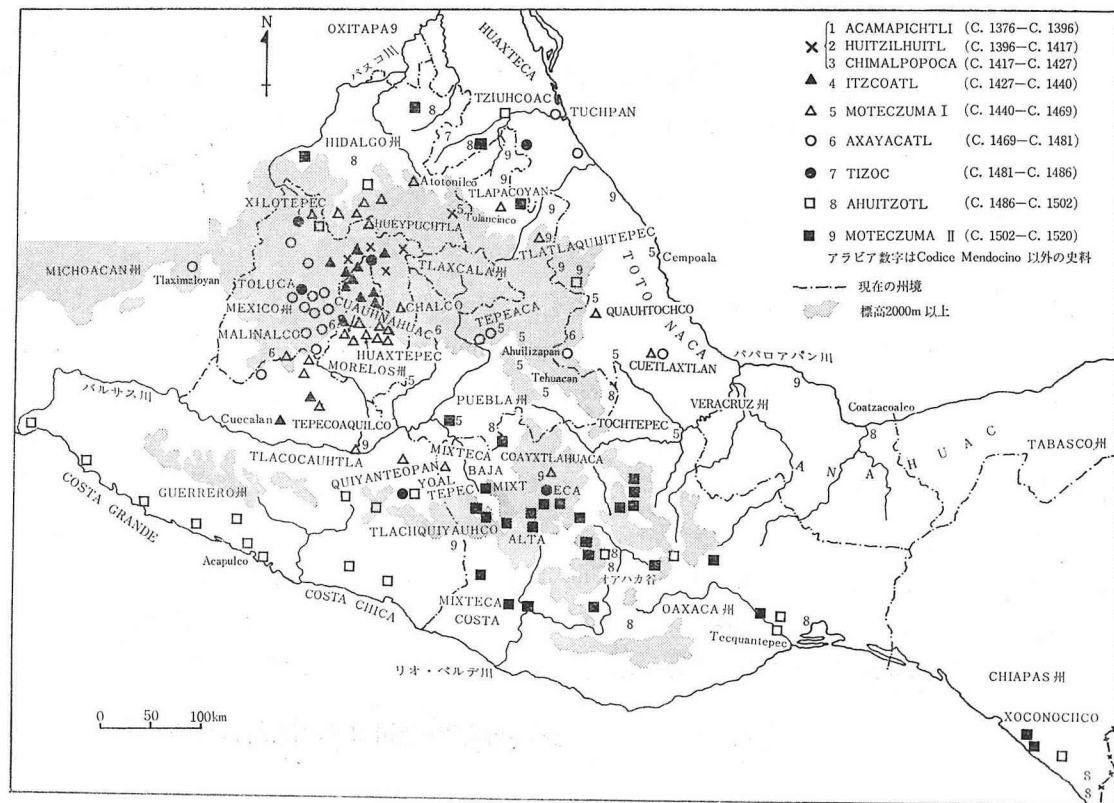


図1 CODICE MENDOCINO
 第一部(征服記)によるメヒコ歴代諸領主の征服活動

(四)大拡張期。アウィツォトル Ahuizotl (在位一四八六—一五〇二)、モテスマ二世によるトトナカ地方 Totonacatlalli^④、ミステカ地方 Mixtecatlalli^⑤、アナワク地方 Anahuacatlalli^⑥への本格的な進出が行なわれる。(図1参照)

(一) 一五世紀前半のメヒコ盆地の状況

一二世紀末のトルテカ Toltéca の崩壊とともに行われるチチメカ地方 Chichimecatlalli から非農耕部族が、中央高原に侵入した。トルテカの本拠トーラ Tula が放棄された一因として、乾燥化の進行による農耕可能地の縮小—南下が指摘されている。^④ こうしてメヒコ盆地に侵入した非農耕部族のいくつかは、トルテカの農耕民を基盤として、自らをトルテカの王統の後継者と称するようになった。これがいわゆる亜トルテカ系のプエブロである。メヒコ盆地には五の亜トルテカ系プエブロがあった。

その創設年度順に挙げると、(1)チャルコ湖の島に定着したシコ Xico、(2)ソチミルコ湖の北岸のコルワカン Colhuacan、(3)テスココ湖西岸のアスカポツアルコ Azcapotzalco を中心とするテパネカ Tepaneca、(4)シャルトカン湖の島に定着したシャルトカン Xaltocan、(5)テスココ湖東岸のテスココ Texcoco を中心とするアコルワカン Acolhuacan である。^⑤

またメヒコ盆地の南部には、ソチミルカ Xochimilca、チャルカ Chalca という農耕部族が栄えていた。もっとも遅れてメヒコ盆地に到着したのが、メヒカ Mexico である。伝承によれば、一二四八年にメヒコ盆地の北部のツォンパンコ Tzompanco に侵入し、流浪の末テスココ湖中の島へ定着し一二三五年にテノチティトランを建設したといわれる。^⑥

こうしたメヒコ盆地の諸プエブロに政治的統一性をもたらしたのが、テパネカの主邑アスカポツアルコの専制君主テソソモクである。メヒカの第二代領主ウイチリウイトルは、テパネカと姻族関係を結び、軍事的な奉仕をした。^⑦ 彼の治世に征服されたプエブロとして、アコルワカンのプエブロやシャルトカン、チャルコなどがあるのは、テソソモクの軍団の一員としてメヒカが征服活動にたずさわったからである。

こうしたメヒコ盆地の有力プエブロの多くはテスココ湖岸に立地するか、あるいはこれに注ぐ河に沿った所に立地して

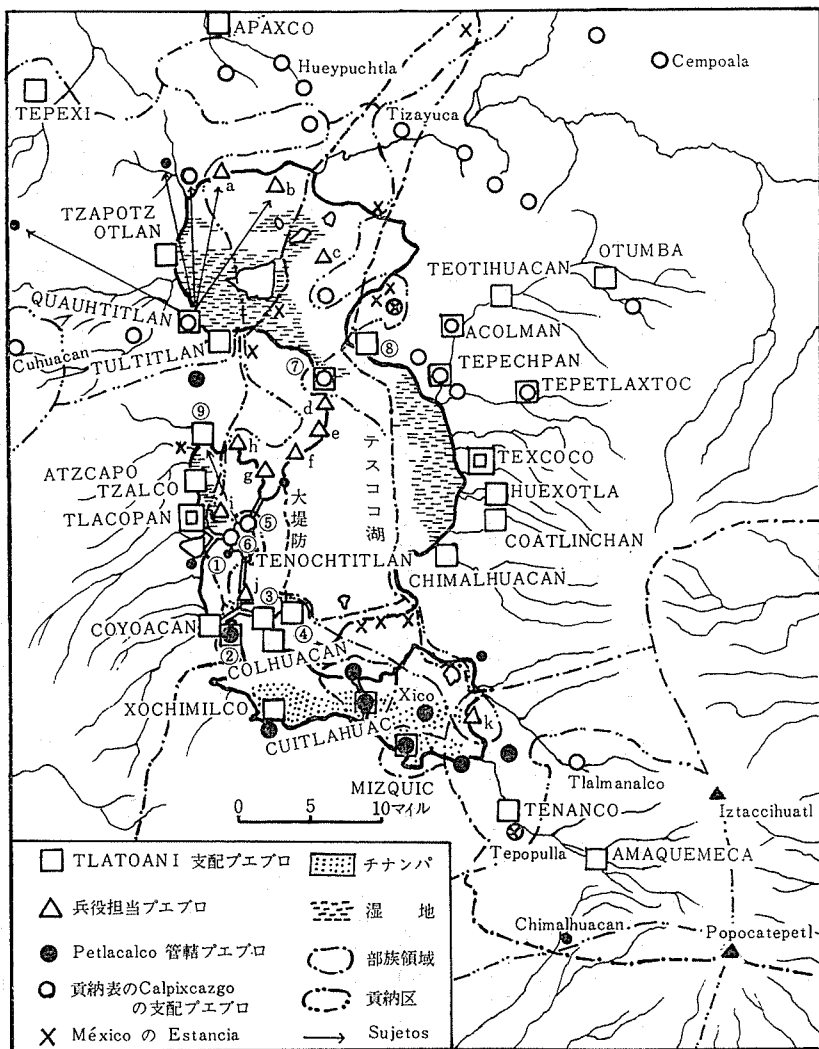


図2 メヒコ盆地（湖水位は1519年当時）

- | | | |
|-----------------|------------------|------------------|
| A. Citlaltepec | E. Coatitlan | I. Popotla |
| B. Tzompange | F. Huixachtitlan | J. Iztacalco |
| C. Xaltocan | G. Coatlayauhcan | K. Chalco Atenco |
| D. Acalhuacan | H. Acolahuac | |
| ① Aztacalco | ④ Ixtapalapa | ⑦ Ecatzinco |
| ② Huichilopocho | ⑤ Tlatelolco | ⑧ Chiconahutla |
| ③ Mexicaltzinco | ⑥ Petlalcalco | ⑨ Tenayuca |

いた。(図2)そしてチナンペ耕作^⑧、あるいは地区灌漑^⑨ district irrigation によった生産性の高い農耕によってトウモロコシ、豆、チア Chia あるいはウァウトリ Huautli^⑩といった主穀作物を栽培していた。しかし、第四紀以降乾燥化が続いたためテスココ湖は内陸排水湖化し鹹湖となっていた^⑪。さらにテスココ湖は標高約二一〇〇mの位置にあり、寒冷な氣候でありいわゆる Tierra fria の土地であった。そのため木綿を得ることができず、一五世紀までは、マゲイの繊維で織った衣服を着用していた^⑫。

こうした状況の中でテスココ湖中の小島に定着したメヒカは、軍事的には安全であっても常に人口過剰に悩まされたといえる。チナンペ方式による耕地・居住地拡大も十分な解決ではなかった。テノチティランの双子都市ともいえるトラテロルコ Tlatelolco は、カヌーによる湖上輸送という利点によって、メヒコ盆地の商業的中心となっていた。一方、テノチティランに依拠するメヒカは、初代領主アカマピチトリをコルワカンから迎え、二代領主ウィチリウィトルは熱帯地域のクアウナワクの領主の娘を妃とするなど姻族同盟を結ぶことで、その位置を安定させようとした。

しかし第三代チマルポボカは、アスカポツアルコの単なる封臣でしかなかった。そして、コヨアカン Coyacan の暴君マシュトラトン Maxtlaton によって暗殺される^⑬。こうして、メヒコ盆地のプエブロはチャルコを除いてほとんどテパネカの支配するところとなる。メヒカは木綿製品をテパネカに貢納していたという^⑭。

(二) 三都市同盟

第四代イッコアトルを軍事総司令官として、メヒカはアスカポツアルコを一四二九年に征服した。翌年、テパネカのトラコパン Tlacopan およびクイトラワク Cuicahuac の領主と同盟を結びソチミルカを征服した。そして一四三一年アコルワカンのテスココとも同盟を結ぶ。これがいわゆる三都市同盟とよばれるものである。

これは一種の軍事同盟であった。テノチティラン、テスココ、トラコパンの領主相互は対等の関係を持ち他者を支配することはなかった。そして、いずれかが攻撃を受けた時は、他の二者が支援するという同盟であり、共通の神として軍

神ウイチロポチトリ Huizilopochtli を祭祀した。^⑮

こうした同盟のもとで、メヒカはコヨアカン、ミスクイク Mizquic、クイトラワク、ソチミルコといったメヒコ盆地南部の淡水湖ソチミルコ湖、チャルコ湖岸の豊かな穀倉地帯、いわゆるチナンパ耕作地帯のプエブロを次々に征服して行く。

こうして征服されたプエブロの土地は、メヒコ王室の土地とされ貢納が課せられた。そして注目すべきは、征服活動で功績のあった貴族、戦士たちに土地と貢納の分割給付がおこなわれたということである。たとえば、アスカボツアルコ征服後、トラカエレル Tlacalel には一〇スエルタ（約一〇〇ha）、有力貴族には各二〜三スエルタ、また戦争において活躍したバリオ barrio には、その祭神行事のために一スエルタが与えられたという。^⑯ この土地は Voatalli と呼ばれ、征服された土地の三分の一がそれに充てられたという。^⑰

こうした征服から三都市同盟の傘下への編入の過程をチャルカについてみよう。^⑱ チャルカはテパネカの支配も排撃し、メヒカに対しても一四四五年から二〇年にわたる抵抗戦を続けている。チャルカは一二世紀中頃に、メヒカ盆地の南西部チャルコ湖南岸からポボカテペトル山 Pico de Popocatepetl の西山麓に移住定着したといわれる。五つの氏族が一一の主邑に割拠し、連合によってチャルコの国 Chalcatyoti を構成していた。

このチャルコの一主邑 Tlacochcalco Chalco の Tepenualpan に対してモテクスマー一世は一四四五年に、神殿建設に使う材木を貢納するように命令した。これが拒否されたためメヒカはチャルカに対して宣戦布告した。一四五一一五四年の飢饉、疫病の流行により疲弊したチャルコ地方は、次第に劣勢となり、一四五九年に Tlamanalco の領主が降伏した。そして戦線はチャルコ全域に拡大し、一四六五年に八名の軍事司令官が投降し、二〇年に及ぶ戦争状態に終止符が打たれる。領主の一部はウェシヨチン Huxotzinco へ亡命したといわれる。

以後、二二年間、領主が不在となる。一四七九年に、Tlamanalco と Amagueyec 貴族がメヒカの都で服属を意味

する舞を奉納し、メヒカ領主アシヤカトルの紋入の下帯などを下賜される。こうして翌年、チャルコの土地へメヒカ領主の小作人が入植し Xocoyotepēc, Ototicpan のエスタンシアが成立する。一四八二年には大神殿建設用の材木を労働奉仕によって切り出している。

チャルコ地方の治安維持、統治のためには、メヒカの軍事的統治者 Cuauhtlaque が Amaquemea, Tlalmanalco, Tenanco, Tepopulan, Xochimilco, Chimalhuacan に派遣されていた。しかし、一四八六年にはティンクによって旧領主権の復活が認められた。

このように征服されたプエブロは貢納・労働奉仕というかたちで三都市同盟の支配下に入る。それと同時に、メヒカの第三期の征服活動には、同盟軍の一員として参加する。こうして、メヒコ盆地の諸プエブロは、三都市同盟の支配領域の中核地域を構成するのである。

① 厳密に言えば folio 17^v-18^r は本来第二部に編集されるべきものであった。すなわち、このフォリオは第二部の原典と見做されている貢納表 Matricula de Tributos の第一葉と同じである。

Barlow, Robert H., *The Extent of the Empire of the Colima Mexica*, Ibero Americana, No. 28, Berkeley and Los Angeles, 1949, pp. 126-68.

Zantwijk, R. A. M. van, "La organización de once guariciones aztecas: una nueva interpretación de los folios 17^v-18^r del Codice Mendocino", *Journal de la Société des Américanistes*, Tomo LVI (1967), pp. 149-60.

② 第九代ギナント二世S發うは種々あるが (Moteuhzoma, Moteuczoma, Motecuzuma, etc.) 本稿ではあえて統一せず出典の綴りに従った。それゆえギナント二と記す例が多い。なお、その他の人名、地

名についても同様である。

③ フナワクとは「ナワトル語で「水辺」を意味する。具体的には、テスココ湖周囲の地方をさすことにより、メヒコ沿岸の南部をさすことがある。本稿では、後者をさすこととする。

Sahagún, op. cit., Tomo III, pp. 348-49.

④ 一〇世紀と一六世紀における農耕可能地帯の北限は、緯度にして約三度も差がある。この前線の北側が一般にチナメカの土地、chimecaltali = 非農耕遊牧牧民の土地と云われた。

Arnillas, Pedro, "The Arid Frontier of Mexican Civilization", *Transactions of the New York Academy of Science*, Serie II, vol. 36 (1969), pp. 697-704.

Sanders, William T. and Barbara J. Price, *Mesoamerica, The Evolution of a Civilization*, New York, 1968, pp. 33-34.

⑤ Wolf, op. cit., pp. 123-24.

⑥ Codice Aubin, pp. 18-51, Garibay, op. cit., pp. 42-55.
Chimalpahin, pp. 71-74.

テノチティトランの創設年については、一三三五年、一三四五年の二説がある。コディセ・アウビンが、メヒカが依然として一三六二年頃も定着していなかったとしている。

⑦ Chimalpahin, op. cit., p. 190.

⑧ チナンパンは一般に「浮き菜園」と呼ばれている。しかし、実際には湿地に縦横に水路をめぐらし排水機能を増すと同時に、側壁を柳などで保護し浚せつした泥土を積みあげて耕地を造る一種の干拓である。メヒコ盆地南部のソチミルコ、チャルコ湖、テスニコ湖西半にあった。主として蔬菜が栽培された。

Willey, Norman L. and Carlos G. Prada, "El Embrujo de las Chinampas" *Hispanic American Historical Review*, Vol. 19 (1939), pp. 83-96.

Coe, Michael D., "The Chinampas of Mexico", *Scientific American*, vol. 211 (1964) No. 1, pp. 90-98.

Cahnek, Edward E., "Settlement Pattern and Chinampa Agriculture at Tenochtitlan", *American Antiquity*, vol. 37 (1971), No. 1, pp. 104-115.

張賢均「中米都市文明発展の基盤—文化生態学的「考察」—」『民族学研究』第三六卷三号、一九七一年、一三七—一五二頁。

⑨ 単一のメヒコ地方のみにあつたのではなく、地方の発展した部族領域単位の灌漑による。

Wolf, Eric E. and Angel Palerm, "Irrigation in the old Acolhua Domain, Mexico", *Southwestern Journal of Anthropology*,

vol. 11 (1953), pp. 265-81.

⑩ チアはサルビニア科、ウマウトリはママルナスの一種の栽培植物でその種子を食用とした。前者は清涼剤として、後者はそれと同時に春先のトウモロコシ端境期食料だった。

⑪ 第三紀末期の湖水位は標高約二二五〇mで、北西のトーラ川に注いでいた。

⑫ Sahagún, op. cit., Tomo II, p. 16.

⑬ Chimalpahin, op. cit., p. 190.

⑭ Idem.

⑮ Ibid., p. 193, Duran, op. cit., Tomo 2, p. 122.

⑯ Ibid., Tomo 2, pp. 83, 101-02, 114.

こうして割り当てられた私的な領有地の耕作は、奴隷によっておこなわれるようになり、従来と異なり平民Macehualに属する者になれ生産物の貢納先が変更するようになった。しかしメヒコ王室の土地には、隸農が入植する場合もあった。図2にみられるメヒコのメクタンパンの多くは、こうした過程によって成立したと考えよう。

Moreno, Manuel M., *La Organización Política y Social de los Aztecos*, México, 1971, pp. 45-48.

⑰ Ibid., pp. 56-57.

⑱ Chimalpahin, op. cit., pp. 199-220.

⑲ 統治支配の形態は、一様ではなく服属忠誠の度合によって異なった。第五章三節参照。

Tapia, Andrés de, "Relación sobre la Conquista de México", *C. D. H. M.*, Tomo II, pp. 561-62.

Moreno, op. cit., pp. 90-91.

三 「熱帯地域」への征服

メヒカの第三期の征服活動はメヒコ盆地における三都市同盟の覇権確立とともに開始される。寒冷地域であるメヒコ盆地は貴族階級の必需品とされている木綿の栽培は不可能であった。従来、こうした必要物資は交易、あるいは姻族同盟を利用してメヒコ盆地にもたらされていた。メヒカの征服は、このような必要物資を確保するために交易圏の拡大と掌握、さらにその生産地の直接的支配をめざした経済的動機によるものといえる。

既にイッコアトル在位中に、ソチミルカの支配下にあったアフスコ山地南麓のクアウナワク、Xinteppecを経て、ゲレロ州のウイツコ山地周辺のコウイスカ Conixca の土地へと侵攻が始まっている。チャルカに対してメヒカが執拗に征服活動をした背景には、こうした熱帯地域へ至る最良のルートを掌中に納める意図があった。三千 m を越える火山群で遮ぎられたメヒコ盆地にあって、チャルコ南部の峠は二五〇〇 m ほどであり、メヒカが直接熱帯地域に近づくためには絶好の位置であった。

(一) モテクスマー一世の征服

モテクスマー一世の在位した三〇年間において、メヒカは数多くのプエブロを征服する^①。征服記によると、コディセ・メンドシノ第二部の貢納表にある三八地区の主邑と仮定したプエブロの約半数を征服している。

一四五〇年に、テスココ領主ネサワルコヨトル Nezahualcoyotl (在位一四一八—七二) によって再建されたトランシンコは、北東方面への進出の前哨基地となった。ここからトラハコヤン Tlapacoyan、トラトラウクイテペク Tlatlaquique-Pec を征服し、メヒコ湾岸のトトナカ地方にまで進出する^③。一方、チャルコからボポカテペトル山南麓のトラルウィカ Tlahuica 地方を征服し、中央高原の南縁沿いにもメヒコ湾岸へ至る。

特に後者のルートは、メヒコ盆地の諸プエブロの隊商の主要な交易ルートであった。このルートに沿ったプエブロの征

服の多くは、メヒコを始めとする中央高原の商人の安全が脅されたことを口実として始まっている。こうしたプエブロは、メヒコ湾岸あるいはテワンテペク地峡、オアハカ高原などと中央高原との交易の中継地、物資の集散地の中心として商業的、軍事的な観点からも、メヒカにとっては魅力的なものであった。これらのプエブロの領主は市場を開設し、そこで中央高原の商人が熱帯地域の産物を手に入れていた。カカオ、グラナ、染料、高価な羽毛飾付の衣服、金銀細工、装身具などが持ちかえられていた。^④

いくつかの事例をあげてみよう。

テペアカ Tepaca がメヒカ、テスココ、テペネカの商人を殺害したという報告を受けたメヒカはテペアカ領主の Yolcu に対して使節を送って服属を勧告した。拒否されたためテスココ、ソチミルコ、コルワカン、チャルコ、クイトラワク、コヨアカン、アスカボツアルコとともに軍隊を送りテペアカを征服した。テペアカはメヒカへの服属を宣誓し、いけにえを提出した。そしてモテクソマ、トラカエレルおよび最高評議会の四人を含めメヒカ貴族へ大量の贈物を要求された。そして八〇日ごとに貢納すべき物が指定された。こうした貢納を徴収し治安を維持するため Coacuech という名のメヒカ貴族が統治者として任命された。それとともにテペアカの市場を整備しメヒカの管轄下に入れた。^⑤

オリサバ山 Pico de Orizaba 東麓のクエトラストラン Cuexlatlan は、メヒカの使節 Teucene を殺害したため征服された。すなわちメヒカは祭祀に使うために大きな巻貝、帆立貝、Icoetas を納めてくれるように、メヒコ湾岸のセンポアラ Cempala に使節を派遣した。しかしトラスカラ Tlaxcala の領主の進言によって、クエトラストランの領主は、この使節をオリサバ地方で殺した。そしてトラスカラに対しては大量の金銀、宝石、衣服、羽毛、カカオを贈り同盟関係を維持した。このためメヒカは軍隊を派遣し、オリサバ、クエトラストラン地方を征服した。そして、Pintol という名の貴族が統治者として任命された。彼は彼の一族を率いてクエトラストランに赴いている。この地方からは、砂金、衣服、羽毛、宝石、装身具、カカオ、なめし革、巻貝、帆立貝、Icoetas、こはく、燻製魚が貢納された。^⑥

しかし、クエトラストランは再びトラスカラと通じ反乱を起した。この反乱の鎮圧後、貢納は従来の倍にすることが決められた。そしてメヒカの官位をもつ2名の貴族が治安維持を担当するために派遣された。この地方からは、モテクソマ一世がチャプルテペク Chapultepec に保養地を建設した際、カカオ、杓杓の木などが送られ、それらは氣候に適したウアステペク Huastepac に植樹されたという^⑧。

ミステカ高地 Mixteca Alta の北端に位置したコアイストラワカ Coaxtlahuaca の市場には、メヒコ盆地のプエブロの商人が来て交易にあたっていた。コアイストラワカの領主たちが、ある日、これらの商人を全員捕縛して殺害しようとした。危うく難を除けたTotitlanの商人が、この事件をモテクスマ一世に報告した。メヒカは、Chuchon 族の居住地域であるテワカン谷 Valle de Tehuacán を通って、この地を征服した。コアイストラワカはメヒカの永久の封臣となることを宣し、次のような貢納を課せられている。一〇 brazas (約9m) の布地、チレ Chile、木綿、海塩、染料の荷 fardos である。また捕虜は一四五八年に完成した Cuauhxicalli の神殿落成祭典のいけにえとしてメヒコまで送られた。そして統治者としては Cuauhxicalli が派遣された^⑨。

モテクスマ一世は、パパロアパン川中流のトチュテペク Tuctepac も征服したという。その経緯については不明だが、トチュテペクはコアイストラワカを通してメヒカに貢納していたといわれる^⑩。コアイストラワカに課された海塩は、トチュテペクから運ばれたといえる。

こうしたメヒコ沿岸の熱帯低地とともに、南のバルサス川流域の熱帯地域へも進出はめざましい。クァウナワク、ウアステペク、トラスコ Tlachco、テペクアキルコ Tepequacuilco、トラルコサウティトラン Tlalcoyautlan とバルサス低地へ至るとともに、さらにバルサス川沿に征服活動が展開した。こうしてクィアウテオパン Quiautheopan からヨアルテペク Yoaltepec とミステカ低地 Mixteca Baja にかけて達する。

北方面でもメヒコ盆地を越えて、オトミ族 Otomi の居住地域へ進出している。ウエイプストラ Hueipuctla、アソコ

ベン Axocopan、アトニルコ Atotonilco de Pedraza といふトラー川流域のプエブロをはじめ、シロテペク Xilotepec、もう一つのアトニルコ Atotonilco el Grande といった主邑が征服されている。これらのプエブロのうちシロテペク、アトニルコ(前者)には第四代イッコアトルの息子が領主として定着した記録がある。^⑪

(二) モテクスマ一世時の朝貢領域

ドゥランの年代記二五章『戦争によって服属した地方、市からメヒコに搬入される莫大な貢納と富について』^⑫は、貢納したプエブロを記載している。これらのプエブロと征服記のモテクスマ一世の征服プエブロとを比較してみよう。

特に注目されるのは、バルサス川流域のプエブロがドゥランの記録では記載されていないことである。それに反して、征服記ではモテクスマ一世より後代の征服プエブロとされているものが記載されている。たとえば北東方面のバヌコ川流域のチウコアク Tzihcoac、トスベン Tochpan、トサベン Tozapan は一四七〇年以降に征服された筈である。またメヒコ州北西部のマトラチンコ Matlatzincó、トルカ Toluca、マサワカン Mazahuacan、シヨティトラン Xocotitlan など、一四七〇年以降に征服された筈である。さらに一四九〇年以降に征服されたテワンテペク地峡周辺のプエブロが貢納地域として記載されている。すなわち、テクアンテペク Tecuantepec、ソコノスコ Xococonchoco、アムストラ Amaxtla をはじめグアハカ Guaxaca まで含まれている。

こうした矛盾は、いくつかの年代記を比較するとしばしば現われてくる。ドゥランの年代記などいわゆるクロニカX系の年代記では、モテクスマ一世の一四五一年にワステカ Huasteca 地方への遠征があったとしている。この遠征はトランシンコを起点におこなわれていることから、他の年代記ではテスココ領主ネサワルコヨトルのワステカ地方進出として扱われていることを指すとも考えうる。また、クロニカX系はグアハカの征服がモテクスマ一世時におこなわれたとしている。^⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽

こうした推定が正鵠を得ているとすると、ドッランの貢納記録に含まれていないバルサス川流域の諸エブロは、征服されたものの、一定の貢納体制にはまだ充分組み込まれていなかったとも解しうる。この点については、今後の研究をまづことにしたい。

四 一四八〇年代のメヒカの支配領域

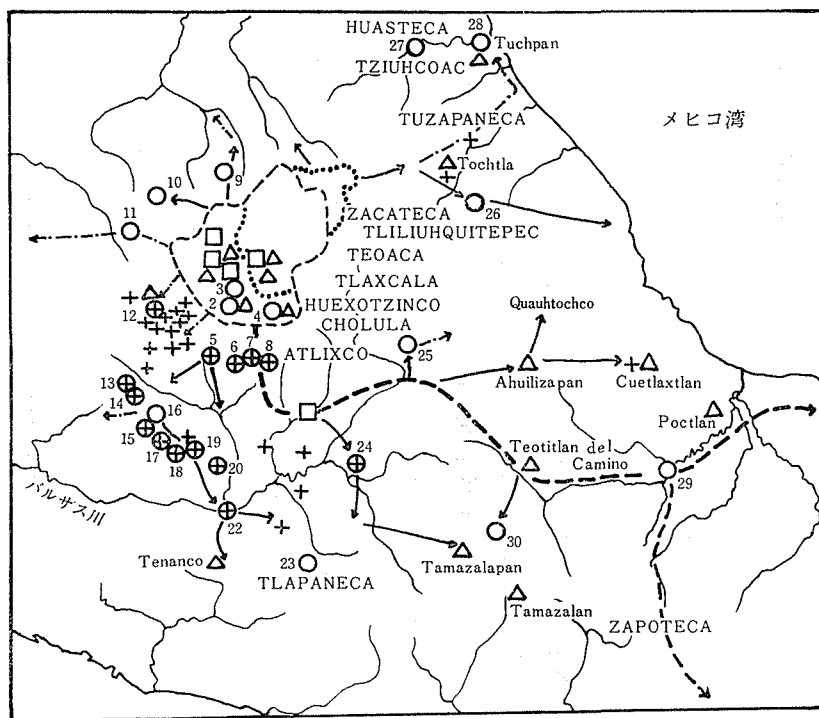
モテクスマ一世による急激なメヒカの征服戦線の拡大を引き継いで、アシヤヤカトルは西方への拡大を試みる。それは、マトラチンカ Matlatzinca 系のプエブロ間の対立を利用したものであった。テナンゴ山地南麓のテナンチンコ Tenantzinco の領主が、北麓のトルカ谷のマトラチンコ・トルカの圧迫を苦とし、メヒコに援助を乞った。アシヤヤカトルは侵略の口実をつくるために、トルカに神殿建設用の杉・松材を貢納するように要求した^①。

こうしてトルカ谷を征服すると同時にいわゆる山岳地域 la serrania に位置するオクイラ Ocuitla などのプエブロが征服された^②。またこの地方にあるメヒカの聖地マリナルコ Mainalco には、メヒカの貴族 Citlacoatzin が領主として任命されている^③。

シヨコティトランからさらに西進し、ミチョアカン州のパックアロ湖岸のチンツンツァン Tzintzuntzan を本拠とするタラスカ Tarasca と、トラヒマロヤン Tlaximaloyan で交戦したが大敗北を喫した^④。以後西部戦線は、現在のミチョアカン州との境界を越すことなく、どちらかといえば、タラスカ側が攻勢となり、しばしばメヒカの要塞が攻撃を受けている。こうした戦線の拡大とともに、既征服プエブロを基地として周辺地域の平定をおこないメヒカの支配領域の安定化を試みている。こうして、北接する商業都市トラテロルコを最終的には併合し、領主権を篡奪するや、メヒカは、貢納表の三八地区の実に三分の二の地区の主邑を征服したことになる。またテスココ王ネサワルコヨトルの死後、テスココの勢力が衰えていき、メヒカが事実上三都市同盟の盟主となっていく。こうした、一四八〇年代、第三期征服活動から、第四期の大拡張期への転換期におけるメヒカの領域統治の構造について見ていこう。

(一) ティソク時代の統治領域

アシヤヤカトルの死（一四八一年）後即位した彼の兄ティソクは、歴代諸王の事蹟を記した石碑を建立した。ティソク石



- | | |
|-----------------------|----------------------------------|
| メヒコ盆地 | 領主国 (Señorio por si) |
| テスココ領 | Tizoc 石碑 |
| → Motecuzuma I の征服ルート | + Tizoc 時代統治者派遣プエブロ |
| → Axayacatl の征服ルート | ○ 神殿落成式に朝貢したプエブロ
(番号は表1-⑨に対応) |
| → Anahuac への交易路 | 大文字は、犠牲となった部族、プエブロ。 |

図3 1480年代のメヒカの支配領域

「アステカ帝国」の成立過程（小林）

表1 1480年代のメヒカ支配プエブロ

㊤ 1486年にいけにえを集めた地区	1486年にいけにえとなった地方
Provincia de Tezcuco Tacuba Xuchimilco Chalco Mazahuaques Cuauhtlapaneacas	Huexotzincas, Tlaxcaltecas, Atlixcas, Tliluhquitepecas Cholultecas, Teoacas, Zacatecas Zapotecas Huatecas Tzincoacas Tuzapanecas Tlapaneacas
㊤ 1486年の貢納プエブロ	㊤ Tizco時代の統治者派遣プエブロ
1 Ciudad de México 2 Xuchimilcas 3 Chinampaneacas 4 Chalcas 5 Cuauhnahuac 6 Yautepecas 7 Acapichtecas 8 Huaxtepecas 9 Atocpaneacas 10 Xilotepecas 11 Xocotecas 12 Matlatzincas 13 Tzacualpaneacas 14 Nochtepecas 15 Teotliltecas 16 Tlaxtecas 17 Youaltecas 18 Uitzocas 19 Tepecuacuillas 20 Couixcas 21 Chiapanecas 22 Tlalcozauhtitlan 23 Tlapaneacas 24 Piaztecas 25 Tepeacas 26 Tlatlahquitepecas 27 Tzincocas 28 Tochpaneacas 29 Tochtepecas 30 Coaixtlahuacan	“ todo la Chinampa ”（チナンパ地方） { Colhuacan, Itztapalapan, Mexicaltzinco Huitzilopochco Cuauhnahuac Yautepec, Acapixtlan Huaxtepec Matlatzincos, Toluca, Tzinacantepec, Tlacotepec, Calimayan, Calimayan, Tepemaxalco Teotenanco “ los de la serrania ”（山岳地域） { Malinalco, Ocuila, Coatepec, Capuloac Xalatlau- hco, Atlapulco Tzacualpan, Iztapan Nochtepec, Tepetlan Teotlitzac (Tlachmalco) Youallan Uitzoco Tepecuacuillo Couixco Tlalcozauhtitlan Xochhuehuetlan, Olinalan Piaztlan, Chiautlan, Teotlan Coatlapa (Tochtla) Tzicocoac (Tuzapan) Cuetlaxtla

碑と称されるこの石碑は、一七九一年にメヒコ市の中央広場から発掘された。^⑥ この石碑には征服したプエブロと思われる絵文字一五が彫られている。そのプエブロの分布は、征服記のプエブロの分布とはほぼ一致し、征服記の信憑性が考古学的に裏付けられる。

ティソクの即位式の記録がドッランの年代記にある。^⑦ 招待を受けた領主としては、テスココ王、トラコパン王以外に次のプエブロの領主があげられている。チャルコ、ソチミルコ地方の諸領主、いわゆるチナンパ地方 Chinampacas—コルワカン、Itzapalapa Mexicaltzingo Huizilopochco—の各領主、「熱帯地域」のすべての領主、そして、クアウトラルバン Cuautlalpan マトラチンコートルカ、並びにコアトラパ Coatlapa の諸領主である。

「熱帯地域」とは、ここではクアウナワク、ヤウテペク Yautepec ウァステペク、アカピストラン Acapulcan を指すものと思われる。クアウトラルバンは、マサワカと一語に言及される例が多いことから、クアウティトランのことを指していると思われる。コアトラパについては不明であるが、Coatlapa の誤記とすると、プエブラ州西部のイッコアン Itzcoan を中心とする地方と考えることができる。^⑧ コアトラパを除けば、いずれもメヒコからは六〇km 圏内に位置する。これらの領主は、メヒカの発議した征服戦には人員を動員しており、三都市同盟軍を構成する実体であった。

こうした領主の外に、メヒカが代官や統治者を派遣した地方へも招待状が送られている。これらのプエブロの徴税官カルビスケ Calixque は、即位式用の食糧、物資を持参し、ペトラカルカトル Petlacalcatl と呼ばれるメヒコ王室財務長官の管理する倉庫へ納めている。こうして即位式に参列した統治者 Tecontli の派遣されているプエブロは表1-①のとおり四〇を数える。

これらのプエブロのうちトトルテカ Totolteca のみ Señores gobernadores と記されているのを除けば全て、一名の Gobernador が記されている。^⑨ この差異については不明である。トトルテカが Totollan と呼ばれたプエブラ州のアカトラン川流域全体を指すもので、次のピアストラなどを含むとするなら、ピアストラの領主は、メヒカ領主との血縁関係を

主張していたことなどから、土着領主兼メヒカ派遣統治者の官名で言及されたと解釈できる。

さて、これらの統治者の派遣されていたプエブロの分布を征服記のアシヤヤカトルまでの征服プエブロの分布と比較してみよう。

まず注目されるのは、モテクスマ一世の貢納の記録で指摘した矛盾が解消している。すなわちポチテカなどの交易活動によってメヒコに貢納がもたらされたとしたテワンテペク地峡周辺のプエブロが記載されていないことである。他方、バルサス川流域の諸プエブロが記載されている。「熱帯地域」と呼ばれるモレロス州では、四つのプエブロに統治者が派遣されており、独自の領主とともに即位式に参列したと思われる。貢納表のトラスコ、テペクァイルコ地区では計一〇のプエブロ、トラルコサウティラン地区に一、クィアウテオパン地区では二つのプエブロが、統治者の派遣されたプエブロとして記載されている。

またアシヤヤカトルによって征服されたマトラチンカ地方では七、「山岳地域」と呼ばれるメヒコ州、モレロス州、連邦地区の三州境にまたがる地域では六のプエブロに統治者が派遣されていた。一方、北東部では、トチュトラ *Tochtila*、チココアク *Tzicocoac*、トサパン *Tuzapan* の三プエブロに統治者が派遣されている。モテクスマ一世時代の貢納の記録では、それぞれトラコパン、テスココの朝貢領域と見做した地方に、メヒカが統治者を派遣していることが注目される。

クエトラストランには統治者が既に派遣されていたことを述べたが、同じく派遣されていたはずのミステカ高地のコアイストラワカが漏れている。代りに、アトヤク川とミステカ川の合流してメスカラ川となる地域の五つのプエブロに統治者が派遣されている。この地域はトルテカも含めて、ミステカ低地に隣接する地域であり、ミステカ高地へ進出するメヒカの拠点として重要であったと思われる。しかし、征服記の被征服プエブロとしては、ピアストラのみが、第九代モテクスマ二世時代に言及されているだけで、貢納表の三八地区にも含まれていないことが注目される。

(二) 大神殿落成式の記録

いくつかの年代記は、アウィツォトルの即位した翌年一四八七年頃に、メヒカの軍神ウィチロポチトリの大神殿の落成式が挙行されたことを述べている。^⑬ この神殿の建設はメヒカにとって、いわゆるトラカエレルの主導した改革の事業がほぼ完了したことを示している。統治者の派遣などにみられる政治的、行政的な組織化、貢納体制の整備をはじめとする経済的な支配強化、そして正史の編纂などにみられるメヒカ中心主義的な宇宙観による宗教的組織の改造が、ほぼ完了した表明としてウィチロポチトリの大神殿の建設がおこなわれたといえる。

ドウランの年代記の落成式の記録は、メヒカが三都市同盟内、とくにテスココとの力関係において、どのように諸地方を自己の支配統治領域へ組織していったかを如実に示す。

まず神に奉げるいけにえ用の捕虜を提出するように、トラスカラ＝プエブラ盆地の独立的諸領主と戦っているプエブロに使者が送られる。^⑭ テペアカ、Tecamachalco、Quecholac、Quauhquechulla、Atlatlahuacan といったいわゆる「花戦争」Xochiyaotl^⑮の南部戦線の諸プエブロ、並びにその戦争に参加していたメヒコ盆地南部の諸プエブロに使者が送られている。一方西方方面でも、マトラチンコートルカ、マリナルコ、オクイラを始め北西部のマサワカのプエブロにも使者が送られている。こうして、テスココ、トラコパン、そしてソチミルコ、チャルコ地方、マサワカ、クアウトラルパネカ地方の領主がいけにえ用の捕虜をメヒコにつれてきた。^⑯

一方、いけにえとなったのは一一地方の人々で計八四〇〇人である。他の記録によると一万人を越したともいう。^⑰ トラスカラ＝プエブラ盆地の諸領主国ートラスカラ、ウエシヨチンコ、 Cholula、アトリスコ Atlixco、Tlilhquitepec, Teocac, Zacatlan といったトラスカラ北部の独立領主国、そしてトスパン川流域のワステカ、トサパン、チンコアカ Tzincoacas、また南方方面ではオアハカ谷のサポテカ Zapotecas、ゲレロ州のトラパネカ Tlapaneacas の住民がいけにえとなっている。これらの地域がメヒカの征服活動の前線であった。

同時にこうした敵国である地方の領主たちは、落成式に歓待されている。^⑧メヒコの繁栄と富を誇張し服属をうながすためであった。こうした敵国の領主の招待は即位式、大祭典に際してしばしばおこなわれていた。一四八七年には、トラスカラ＝プエブラ盆地のウエシチョンコ、 Cholula、トラスカラ、ならびにトラスカラと同盟関係にあった Tecuac、Tliahquiptepac、Zacatlan の領主、北部ではイダルゴ州北部の強国メツティトラン Melztitlan、トスパン川中流のチウコアクの領主、西部ではミチョアカン州のタラスコの領主、南部では、ゲレロ州東部太平洋岸 la costa chica のヨビチンコ Yopitzinco の領主が列席している。

一方、いけにえとなる捕虜とともに、すでに征服され服属した地方からは、金、羽毛などの装身具、カカオ、チレなどの祭礼用食品が大量に搬入された。こうした貢納を納めた地方については、メヒコ市内の各地区をはじめ約三〇が記載されている。（図3、表1—⑧参照）

この貢納を納めたプエブロの分布をティソク時代に統治者の配備されたプエブロ、征服記のプエブロの分布と比較してみよう。この記録では、新たにアトクパネカ Atcopanecas、シロテペク、シヨロテカ Xocotecas といたオトミ、あるいはマサワカの居住地域が言及されている。このうち前二者はモテクスマ一世時代に、シヨコテカと同一と思われるシヨコティトランはアシヤカトル時代に征服されている。しかし、この地方は完全にメヒカに服することなく、アウィツォトルは一四八六年に出兵して、反乱を鎮圧したという記録がある。^⑨

また、ティソク時代に統治者の配備されたプエブロのある地方は、ほとんど貢納を納めている。クエトラストランが記載されていない理由は不明である。代りに、コアイストラワカ、トステペクの二地方が記載されている。両地方とも、テオティトラン・デル・カミノ Teotitlan del Camino 地方を経て、ミステカ地方、アナワク地方へ至る重要なルートに位置している。こうして、第四期の大拡張期における征服活動の舞台となる地方への橋頭堡が着実に構築されていたといえよう。

一方、テスココは、服属する二七のプエブロを有し、メヒカに対して自らの領主権を保持し、貢納も一際納めないといい対等の関係を維持していた。^⑭しかし、テスココの支配領域は漸減し、その領域内にメヒコ領主の隸農が入植し耕作することを承認せざるを得なかったという。^⑮

① Duran, op. cit., pp. 267-68.

杉・松材はメヒコ盆地周囲の山地から自給できた。特に Ahuehuetl という巨木が著名であった。

② Duran, op. cit., p. 293, Chimalpahin, op. cit., p. 209.

③ Garibay, op. cit., p. 62.

④ Duran, op. cit., pp. 281-85, Chimalpahin, op. cit., p. 208.

この時期のごくつは「一四七一年といわれ、一四七四年のトルカ谷征服に先立っていた。一四七一年以降も、アシャヤカトルはしばしば独自に侵入を試みた。彼の死は、この方面での作戦中の負傷が原因といわれる。

⑤ Codice Mendocino にある「第四代イッコアトルが、トラテロルコの領主クアウトラトア Quauhtlatoca を征服している。彼は一四六〇年にテノチティトランで死去しており、モクィウィシモ Moquihuix というモテカスマ一世の甥が領主として迎えられた。しかし、一四六九―七三年の戦争において伝統的な統治補佐官 (Chinacoatl) 制が廃止され、完全にメコンが併合され、一四七五年に Itzcohuatzin という軍事司令官 Tlacochcalcatl が統治者として派遣された。

Chimalpahin, op. cit., pp. 206-09.

⑥ Selier, "Die Ausgrabungen am Orte des Haupttemples im Mexico" op. cit., Bd. II, S. 767-904.

⑦ Duran, op. cit., pp. 306-07.

⑧ 一五七九年のオルテリウスの新スペイン地図では、Coatla-

apuecas がこの地方に置かれていた。Cauhtlapaneas とは考えられなく。

Ortelius, Abraham, "Hispaniae novae sive Magnae recens et vera descriptio, 1579" *Theatrum Orbis Terrarum*,

⑨ この倉庫のある所は「ペナンカルン Petlacalco」と呼ばれ、トランペンに至る堤道にあった。

Salagün, op. cit., Tomo II, p. 312.

⑩ トトルテカの諸領主は「Chiauhua, Piaztlan, Teotlatla などを含むとも考えうる。この地域が、征服された年代もはっきりとせず、貢納表においてもカルビスケの配備されたプエブロとしては記載されていない。

⑪ 「熱帯地域」とは、一般的に標高千 m 以下の土地と考えていいが、ドワランの年代記では「モヘロス州を指していると考えられる。

⑫ いわゆる寒冷地域「Tierra fria」に属する標高約二三〇〇 m 以上の土地である。

⑬ Duran, op. cit., pp. 333-41, Chimalpahin, op. cit., pp. 220-21, Garibay, op. cit., p. 62.

この神殿が着工されたのは、ティンク時代の一四八二年といわれ、前述のティンク石碑「太陽の石 Piedra del Sol」などのモナメントが同時に奉獻されたといわれる。

⑭ トラカニレルは、イッコアトル時代からアシャヤカトル時代まで、メヒコ大領主の補佐役であるシウアアトル Chinacoatl の称号を有

し、メヒカの政治的改革の立案者であった。モテクスマ一世と弟といわれる。

⑮ León-Portilla, op. cit., pp. 91-99.

⑯ Duran, op. cit., pp. 334-35.

⑰ この花戦争の由来は、アコスタも述べている。すなわち神殿に捧げるいけにえを調達するために、近隣のトラスカラ地方との戦争状態を持续させていた。

アコスタ、増田義郎訳・註『新大陸自然文化史』東京、一九六六年、下巻、四〇八頁。

Duran, op. cit., pp. 418-19.

⑱ Ibid., p. 340.

⑲ Idem, Chimalpahin, op. cit., p. 221.

トルケマダは七万人と述べている。また六万人強という説もある。

Clavijero, op. cit., p. 121.

⑳ Duran, op. cit., pp. 337-39.

五 モテクスマ二世時代のメヒカ支配領域

メヒカの第四期の征服活動は、前述のウィチロポチトリの大神殿の完成後、開始される。「軍国主義者」と称されるアウツォトルは戦線を太平洋岸にまで拡大した。一説によるとガテマラからニカラガまで進出したという^㉑。モテクスマ二世は前領主の征服した地方の平定とその周辺部への征服をおこなうとともに、メヒカの支配領域の制度的な編成を試みようとした。こうしてスペイン人到着前四十年間弱で、メヒカの支配領域は、大西洋岸のパヌコ川と太平洋岸のバルサス川の河口を結ぶ線の東南部をほとんど覆うことになった。これが「アステカ帝国」である。

㉒ Ibid., pp. 319-21.

㉓ Ibid., pp. 335-36.

㉔ テスココに服属するメヒプロの記録として『Codice Chimalpopoca, folio 64, 65』のネサワルコヨトル時代のもの^㉕、ドゥランのネサワルピリ時代のものがある。両者を比較すると、テスココ領の北東部にあり、ワステカ地方への前哨基地であった Huachinango 地方のブエブロが、後者の記録では記載されていないことがわかる。更に貢納表ではテスココ領に相当する第三地区アコルワカン Acolhuacan の領域は縮小している。

Gibson, Charles, "Liamient General, Repartimiento, and the Empire of Acolhuacan", *Hispanic American Historical Review* vol. 36 (1956), pp. 1-27.

㉕ こうして入植活動がおこなわれたのは、テスココ領の北部のシャルトカン湖岸である。図2にみられるメヒコのエスタンシアの分布参照。

(一) 「帝国」の空白部

コルテスは、第二書簡でコルア、すなわち「アステカ帝国」の土地にも、コルアに敵対する地方やプエブロが存在していたことを述べている。^② コディセ・メンドシノ第二部の貢納表は、メヒカの貢納を徴収する役人カルピスケの配備されたプエブロを記録している。^③ 三八地区に区分され、その地区の中心地である主邑 *Cabeeria* を含めて約三八〇のプエブロが記載されている。このうち約四分の三が比定できる。^④ そのプエブロをドットすると図4のようになる。その分布密度はメヒコ盆地周辺部で高く均一ではないが、いくつかの空白部がある。

空白部は、メヒカに服属し貢納はしているもののカルピスケの置かれていない地域、そして未征服地域と考えられる。この貢納表が示している時期は、ミステカ高地のトラチクィアウコ *Tlachuahuco* の征服された一五一一一―一二年以後である。^⑤ また一五一五年に北東部のトラトラウクィテペクが再征服された記録もあり、スペイン人到着直前の状況を示していることは疑いない。一五一〇年代後期に征服されたプエブロにただちにカルピスケが配備されたとは考えにくい。たとえば、ミステカ海岸部 *Mixteca Costa* のリオ・ベルデ川流域のプエブロは、モテクスマ二世時代に征服されたが、貢納表には記載されていない。貢納表は貢納を納めていたプエブロではなく、カルピスケの配置されていたプエブロを記載しているので、他の資料によって、メヒコへ貢納を納めていたプエブロを補う必要がある。

三都市同盟に朝貢していたプエブロの記録 *Memorial de los Pueblos sujetos al Señorío de Tlacupan, y de los que tributaban a México, Tezcuco y Tlacupan* ^⑥ によって空白部のいくつかを埋めることができる。それによると、センポアラ、ナウトラ *Nautla* などのトトナカ地方、ソスカトラン *Socatlan*、ナナウアティクパク *Nanauatitcpac*、テオワカン *Teouacan* などのプエブラ州南東部からオアハカ州にかけてのいわゆるテォティトラン・デル・カミノ地方、そしてオアハカ谷北東部の山地サポテカ地方およびテワンテペク地峡地方がメヒカに服属していたことがわかる。

「アステカ帝国」の成立過程（小林）

表2 貢納表に記載されたプエブロ

地区名(州名)	プエブロ数	比定しえたプエブロの数・名
1 Tlatelolco (D.F.)	1	1 Tecoloapan, Huicilopochco, Cocotlan, Tepopulan
2 Petlascalco (D.F.)	22	12 { Olac, Cuitlahuac, Tezcacoac, Mizquic, Auchpanco Tzapotitlan, Xico, Tlaçoxiuhco
3 Acolhuacā (Méx.)	26	14 Totolçinco, Tepechpa, Teacalco, Tonaytla, Cenpoalan Tepetlaoztoc, Ahuatepec, Matixco, Temazcalapa Tiçayucā, Teçoyuca, Tlaquilpā, Epaçoyuca, Ecatepec
4 Quauhnauhuac (Mor.)	16	13 Teocalçinco, Chimalco, Huicilapā, Acatlycpac Xochitepec, Miacatla, Coatlan, Xiuhtepec, Xoxoutla, Amacoztitlan, Yztla, Atlicholoayan
5 Huaxtepec (Mor.)	26	22 Xochimilcaçinco, Quauhtlan, Anenecuilco, Olintepec, Quahuilitlyxco, Huicilan, Tlaltiçapā, Coacalco, Yzamattitla, Tepoztlā, Yacapichtla, Tlayacapā, Xaloztoc, Tepcpaçinco, Ayoxochapā Tlayacac, Nepopoalco, Atlatlauca, Totolapā Amilçinco,
6 Quauhtitlan (Méx.)	7	6 Tehuiloyocā, Xalapan, Tepoxaco, Cuezcomahuacā Xiloçinco
7 Axocopan (Méx.)	10	8 Atenco, Tetepanco, Tezcatepec, Mizquiyahuala Yzmiquilpā, Tlaahuililpā, Tecpatepec
8 Atotonilco de Pedraza (Hid.)	7	2 Otlazpā
9 Hueypuchtla (Méx.)	19	6 Tequixquiac, Telapanaloyā, Acayocā, Tezcatepectonco, Atocpan
10 Atotonilco el Grande (Hid.)	6	4 Acaxochitla, Hueyapan, Tulañçinco
11 Xilotepec (Méx.)	7	5 Tzayanalquilpan, Michmaloyan, Tepetitlan Tecoçauhtla
12 Quahuacan (Méx.)	13	11 Tecpan, Tlalatlahuico, Acaxochic, Ameyalco. Huizquilocan, Coatepec, Quauhpanoayā Tlalachco, Chichicquautlan, Huitçilapa,
13 Tuluca (Méx.)	12	9 Calixtlahuacā, Mitepec (Tlacotepec), Metepec Cacalomaca, Calimayan, Teotenanco, Tepemaxalco, Zoquitzinco
14 Ocuilan (Méx.)	6	5 Tenantzincó. Tequaloyan, Tonatiuhco, Coatepec
15 Malinalco (Méx.)	2	2 Zonpahuacā
16 Xocotitlan (Méx.)	1	1
17 Tlachco (Gue.)	10	10 Acamilyxtlahuaca, Chontalcoatlan, Teticpac Nochtepec, Teotlitzacan, Tlamacazapā Tepexahualco, Tzicapaçalco Tetenanco
18 Tepequacuilco (Gue.)	14	14 Chilapan, Ohuapā, Huitzoco, Tlachmalacac, Yoallan, Cocolan, Atenanco, Chilacachapā, Teloioapan, Oztoma, Yhcateopā, Alahuiztlā,

地 区 名 (州名)	プエブロ数	比定しえたプエブロの数・名
		Cueçalan
19 Çihuatlan (Gue.)	12	8 Panotlan, Nochcoc, Yztapan, Petlatlan, Xinuacan Zacatulan, Xolochiuhyan
20 Tlapan (Gue.)	14	7 Yhcateopā, Acuitlapā, Malinaltepec, Totomixtlahuacā, Tetenanco, Chipetlan
21 Tlalcoçauhtitlan (Gue.)	8	4 Tolimani, Ahuaçinco, Mitzinco
22 Quiauhteopan (Gue.)	6	3 Olinalan, Qualac
23 Yoaltepee (Gue.)	6	5 Ehuacalco, Tzilacapan, Patlanalā, Yxicayā,
24 Chalco (Méx.)	6	2 Quanhxumulcō
25 Tepeacac (Pue.)	23	19 Quechulac, Tecamachalco, Acatzinco, Tecalco, Quauhtinchan, Chietlan, Quatlathauhā, Tepexic, Ytzucan, Quauhquechulan, Teonochtitlan, Huehuetla, Tetenanco, Coatzinco, Teopantlan, Epatlan, Nacochtlan, Tepemaxalco
26 Coayxtlahuacan (Oax.)	11	10 Texopan, Tamaçulapā, Yancuitlan, Tepuzcululā, Nochiztlan, Xaltepec, Tamaçolan, Mictlan (-tongo), Cuicatlan,
27 Coyolapan (Oax.)	11	8 Etlan, Quauxilotitlan, Guaxacac, Octlan, Teticpac Tlalcuechahuayā, Macuilxochic
28 Tlachquiauco (Oax.)	3	2 Achiotla
29 Tochtepec (Oax.)	22	13 Otlatitlan, Coçamaloapā, Mixtlan, Teotlilan, Oxitlan, Chinantlan, Puctlan, Yxmatla-tlan, To- tlan, Tlacotlalpā
30 Xoconochco (Chiapas)	8	6 Mapachtepec, Maçatlan, Huiztlan, Huehuetlan Acapetlatlan
31 Quauhtochco (Ver.)	7	5 Tototlan, Tuchçonco, Ahuilizapan, Yzteyocan
32 Cuetlaxtlan (Ver.)	6	2 Mictlanquauhtlan
33 Tlapacoyan (Ver.)	7	3 Xochiquauhtitlan, Acaçacatla
34 Tlatlahuquitepec (Pue.)	11	9 Atenco, Teçitlan, Ayutuchco, Yayaquitlalpa Xonocla, Teotlapan, Yztepec, Yaunahuac
35 Tuchpa (Ver.)	7	3 Papantla, Miahuaapā
36 Atlan (Pue.)	2	2 Teçapotitlan
37 Tzicoac (Ver.)	5	4 Molanco, Cozcatecutlan, Yhcatlan
38 Oxitipan (S.L.P.)	1	1
cf. folio 17 ^r -18 ^r (図 2 —△印)	11	11 Çitlattepec, Tzompanco, Xaltocan, Acalhuacan, Coatitlan, Huixachtitlan, Coatlayauhcan Acolnahuac, Popotla, Iztacalco, Chalco Atenco

註：地区名は、主邑の名を冠した。

地名の綴りは、Codice Mendocino に従っている。

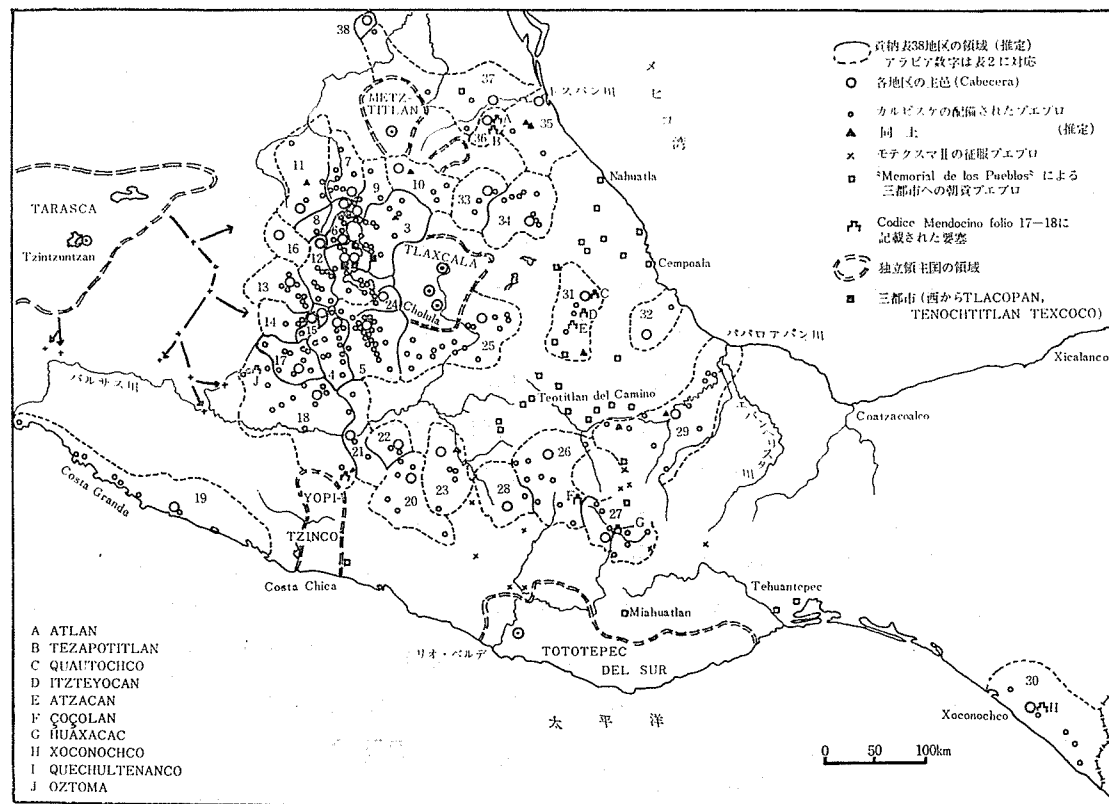


図4 16世紀初期の「アステカ帝国」の領域

これらのうち、山地サポテカを除いた地方は、既にモテクスマ一世時代にメヒカの勢力が及んでいた地域である。すなわちポチテカなどの交易活動と関連して貢納がメヒコにもたらされていた。こうした地方は、彼ら商人の自由通行、商業活動の認可という形でメヒカの勢力に服属していた。これらの地方はメヒカ商人の安全を脅さない限り征服されることはなかった^⑩。しかし第四期の大拡張期においてはメヒカの利権を拡大、独占し、直接的な支配をめざして、征服が始まる。たとえば、テワンテペク地方は、アウィツォトルによって征服される。それはソコノスコ、シヨロトラ Xolotla、マサテカ Mazateca の諸地方がテワンテペクに対して攻撃をかけ、メヒカの商人の活動を阻害したからである^⑪。

こうしてアナワク地方へのメヒカの支配権は、確固たるものになっていく。メヒカの利権の拡大は旧来トラスカラ、テスココの勢力が卓越していたトナカ地方においても試みられた^⑫。しかしその支配権はスペイン人到着時代においても不安定であった。コルテス自身もこうしたセンポアラ地方の様子を記録しており、センポアラが近年まで独立していたと述べている。ディアスもセンポアラの反メヒカの雰囲気を描写している^⑬。

こうしたメヒカ商人の交易活動との関連で、メヒカの同盟関係にあり、ポチテカの自由通行を保証していたのが、テオティトラン・デル・カミノ地方であった^⑭。この地方は通過するメヒカに対して宿舎、食料を提供していた。またメヒカの軍隊に対して物資を調達するプエブロもあり、特にミステカ低地北縁のチアウトラ Chiahuala、ピアストラなどのティソク時代に統治者の派遣されたプエブロがそうであった^⑮。

これらのプエブロを付加すれば、より明確にメヒカの支配領域、すなわち「アステカ帝国」の広がりが見定される。しかし依然として「帝国」内に空白部が残る。これが未征服地域である。未征服地域は二つに分類されよう。一つは、メヒカにとって経済的魅力的の乏しい交通不便な熱帯低地などである。バルサス川流域の低地、パポアパン川支流エバンヘリスタ川流域、同支流トント川流域などがそうである。これらの地域は羽毛、宝石、カカオなどの特産物もなく、粗放な焼畑農業による生産力も低く、現代においても未開発地域でありダム建設の候補地などになっている。もう一つが、メヒカ

と敵対関係にあった地域である。いわゆる独立領主国である。

（二）独立領主国

これらの諸独立領主国についてはスペイン人もしばしば言及している。また既述したようにメヒコ領主即位式、神殿落成式などに敵性国の領主が招待されており、その記録もある。この記録を一四八七年の神殿落成式、一五〇七年の世紀Ximnapilliの替り目の「新しい火」の大祭式^⑤について比較すると、後者ではワステカ地方のチウコアクが記載されていないことがわかる。一度征服されると招待はされなくなるわけである。

一五〇七年の記録では、トラスカラ、 Cholula、ウエシヨチンコ、トリリウキテペクといったトラスカラを中心とした諸領主国、メチョアカン Mechoacan、メティトラン、ヨビチンコが招かれている。征服者、修道僧などの記録も、メヒカの支配下ない地域としてほぼ同一の地方をあげている。ただ両者ともオアハカ州の南部のトトテペク・デル・スル Tototepiec del Sur 地方をあげていない。こうした独立領主国とメヒカの支配領域との前線をダビエスの詳細な研究^⑥を参考にして、図4に図示した。

メチョアカンとはトラスカの別称であり、「アステカ帝国」に対抗する唯一の組織だった勢力であった。メヒカはアジヤヤカトル時代に一時侵入したものの以後は守勢にたっており、両者の境界は大きな変化を示さない。時おり、トラスカはトラスコ、テペクァクイルコ地区の西部へ侵入してきた。^⑦このためオストマ Otoma を始めとする要塞が建設されていた。トラスカはスペイン人到着時においても軍事的拡張を続けており、「トラスカ帝国」は「アステカ帝国」と同じ道をたどろうとしていたとも考えられる。

これに比較すれば、他の独立領主国は、次第にメヒカに吸収される傾向にあった。しかしトラスカは対メヒカ関係において特殊な状況にあった。一五世紀中頃までトラスカはメヒコ湾岸地方との交易によって繁栄していた。遠くアナワク地方まで商人が出かけていた。^⑧しかしオリサバ地方などの同盟国がメヒカによって征服され、メヒカによる経済的封鎖

がおこなわれた。^④しかしその包囲網は北西部でサカトランなどの小領主国がいれば緩衝地帯となり完全なものではなかった。そのため南西部のアトリスコ平原が主戦場となった。モテクスマ二世の対トラスカラ戦争により、チヨルラ、ウエシヨチンコはメヒカの支配下に組みこまれていくが、^⑤トラスカラは独立を維持した。その理由としては、メヒコ盆地からの亡命者などの傭兵、要塞の構築など戦闘能力の強化とともに、トラスカラ対メヒカの戦争の特殊な性格が考えられる。それは、花戦争といういけにえ調達のための儀礼的戦争である面が強く、全面的な征服戦争の舞台ではなかった。すなわち海岸部へのルートを掌握したメヒカにとってはトラスカラ自体は経済的に魅力をもたなかったからといわれている。^⑥

メヒカの征服の前線はオアハカ州などの南東部であり、そして北東部のワステカ地方であった。メッティトランおよびトトテペク・デル・ノルテは、イダルゴ州東部にあり、トラスカラ、ワステカ、メヒカなどと戦争状態にあった。このため経済的に貧困であり、メヒカにクエチトラン Cuetlan の塩山を掌握されるに至っては、外面的独立にも拘らずメヒカの勢力に屈服していたとも考えられる。^⑦一方ヨピチンコはゲレロ州東部のヨピ語を話す未開な部族の連合であった。しかしヨピはメヒカとともに伝承の故地アストラン Aztlan を出立した一支族と考えられ、メヒカの宗教体系において特別の意味を持っていた。^⑧このため敵性国とは別格の形で招待されたといえる。

これに反し、トトテペク・デル・スルは敵性国であるにも拘らず、一五〇七年の大祭式の記録などには記載されていない。トトテペクはコアイストラワカ、トラチクィアウコ、トリヤントンコ Tiliantongo とともにミステカの四王国を形成していたといわれる。^⑨しかし、後三者が一種の連合体としてミステカ高地を占拠していたのに対し、トトテペクは主としてミアウトラン山地南麓の太平洋岸を占拠していた。そしてミステカの他にサポテカ、チャティノ Chatino 族などが居住しており単純な領主国とはいえず、小規模ながらも「帝国」の様相を呈していた。^⑩ミステカ高地が、オアハカ谷―テワンテペク地方に通ずる戦略的に重要な位置にあったため、早くからメヒカの勢力が浸透したのに反し、トトテペクはメヒカと直接対峙することは少なかった。リオ・ベルデ川上流域のミステカ、サポテカ系のプエブロと抗争していた。こう

した事情が、トトテベクが敵性国としてメヒコに招待されなかった背景にあると考えられる。

こうした諸地方の他にも、コアツコアルコ川流域のようにメヒカの直接の支配を排除していた地方があった。^②しかし、ポチテカなどメヒカ系商人の商業活動を黙認するより他に手だてはなかったといえよう。

(三) メヒカの支配領域の統治

こうして画定されたメヒカの支配領域「アステカ帝国」の内部は、決して均一なものではなかった。カルピスケの配備されたプエブロの分布密度の差、貢納品目の差などにも表われているように、メヒカの土地 *Mexicayotl* 畿内と、そうでない地方 畿外とは異なった統治がおこなわれていた。

ロディセ・メンドシノ *folio 17-18* は、メヒカによって畿外に配備された要塞についての貴重な記録である。これらの要塞は、テスココ湖岸の一一のプエブロ (図2参照) から徴発された人員によって防備、植民され、メヒカ中央政府の官職の称号を有する聖・俗二名の総督によって統轄されていた。^③こうした要塞は一一あり、図4に示したようにいずれも畿外にあった。北東のアトラン *Atlan*、テサポティトラン *Tezapotlan* は、メッティトラン包囲網の一翼を担うとともに、ワステカ地方支配の要であった。クアウトスコ、イッテヨカン *Iztetoycan*、アツァカン *Atzacan* の三要塞は、オリサバ山東麓にあり、トトナカ地方の平定活動の基地であり、同時にメヒコ湾岸への商業交易活動の安全を保障していた。オストマは既述の如くタラスカに対する防衛基地であった。クエチュルテナンコ *Quechultenanco* はゲレロ州太平洋岸へ至るルートを確認するとともにヨピチンコ包囲網の基地であった。またチアパス州太平洋岸のソコノスコにも要塞が置かれ、羽毛、宝石、カカオなどの貴重品の産地の確保と治安維持にあたったといえる。

畿外における最も文明的な地方であったミステカ高地、オアハカ谷に対しては、ソソラン *Cogolan*、ウアスヤカク *Huaxyacac* の他にポクテベク *Potepec* にも要塞が置かれたと考えうる。^④ミステカ高地は貢納表のコアイストラワカ地区、トラチティアウコ地区に、オアハカ谷は、コヨラパン *Coyolapan* 地区に、ほぼ相当するといえる。この二地方のメヒカ

侵入前の政治的中心地であったトリイラントンコ、テオサポトラン Teocapotlan の両者が貢納表に記載されていないことは注目に値する。この二つの中心地プエブロに服属していた周囲のプエブロは貢納表に記載されている。すなわち、メヒカはこれらの地域を勢力下においたものの旧王統の權威を否定せず独自の領主権を認めていた。^⑨しかし、旧来のプエブロ間の服属関係は認めず、その旧王統の領主権を領主の居住するプエブロのみに限定し、他のプエブロにはメヒカのカルピスケを配置したのである。しかし、カルピスケを配置されたプエブロも自由に領主を選ぶことができ、旧来の独立性を完全に失うわけではなかった。

オアハカ谷におけるメヒカの支配は更に複雑であった。本来はサポテカの居住地域であった肥沃なオアハカ谷には一五世紀以来ミステカの植民活動が続いていた。^⑩メヒカのこの地区支配の中心は、ミステカの植民プエブロであったコヨラパンであった。それは、サポテカの政治的中心テオサポトランに北接していた。そして、ウアスヤカク要塞における軍事力を背景に、ミステカの植民を認めたサポテカ系のプエブロにカルピスケをメヒカは配備していた。それゆえテオティトラン・デル・バジェ Teotitlan del Valle のように、コヨラパン、テオサポトラン、そしてテワンテペクの三者に貢納を納めるといった複雑で重層的な支配関係が、オアハカ谷にはみられた。^⑪そのためスペイン人がオアハカ谷に到着した時も、プエブロ間の抗争が続いていた。メヒカの要塞ウアスヤカクの軍事力が絶対的ではなくしばしば包囲されていた。他方、モテクスマ一世時代に征服されたミステカ高地北部のコアイストラワカのようにメヒカの統治者によって支配され、旧来の領主権を否定されたプエブロもあった。

モテクスマ二世時代に統治者が派遣されていたプエブロの多くは、貢納表の各地区の主邑と一致する例が多い。^⑫二〇のうち一五が一致しており、貢納表の地区の番号で列記すれば、二、四、五、七、八、一一、一三、一四、一七、一八、二〇、二六、三二、三五、三七の各地区の主邑である。一致しない五プエブロのうち、アトクパン Atopan と Itzcuin-cutlapilco は第九、アヨチンテペク Ayotzintepac は第二九地区にある。Aztacalco は、テノチティトランの四大地区の

一つである南西部の Moyotlan 地区の島である。^④ Tapan はメヒコ盆地の北東部に広がるアパン平原のプエブロであろう。^⑤ これらのプエブロの分布は、ティソク時代のそれと基本的には大差はない。メヒコ市内にある Petacalco, Azacalco を除けば、メヒコ盆地内の三都市同盟を構成している有力プエブロの支配地域——貢納表の第一、三、六、一二、二四地区——にはメヒカの統治者は派遣されていない。メヒコのエスタンシア拡張はみられたものの、独自の領主の領主権は認められていた。^⑥ 統治者の派遣されたプエブロは、第三期の征服活動期にメヒカの支配下に入った地方にある。その分布がティソク時代以上に拡張しなかったのは、第四期の大拡張期にメヒカの勢力下に入った地方の統治支配が、それまでとは異なっていたからといえる。すなわち、そこでは旧来のプエブロの領主権を篡奪するのではなく、それに覆い被さる形で功利的に貢納を手にしうという傾向がみられた。そしてそれらの地域における治安維持を、軍事的要塞の武力によって保持しようとした。

しかし、遠隔地におけるメヒカの支配は、基本的には個々のプエブロとの服属——貢納関係の代数的な総和を越えるまでには、貫徹しえなかった。貢納表の各地区は、必らずしもその地方の旧来の政治的領域を踏襲してはいない。むしろ旧来のまとまりを解体する傾向さえみられる。そして、メヒカの軍事力のもとに、それらを再統合するのでなく、いたずらにプエブロ間の反抗・紛争を増強させているようにも思える。こうして「アステカ帝国」完成の前段ともいえる一種の政治的アナキーが、メヒカの専制体制への傾斜とともにみられた。

統一をもたらししたのは、東方の海上から来た白き人々であった。それは、ケツアルコアトルの再来、新しい生命の太陽の世紀の到来ではなく、ハプスブルク家の「世界帝国」への先兵、征服者と宣教師であった。

① Muñoz, Camargo, op. cit., p. 119.

しかし、土着史料の多くは「メヒコの商人あるいは使節がガテラに行っていたことは述べているものの、征服については述べていない。

この地方にもナワトル語系の住民がいることなどから征服活動があった。

たと推定されたようである。

Clavijero, op. cit., p. 124, Gibson, op. cit., (三章注⑩) p. 383.

② Cortés, op. cit., p. 52.

③ 従来、貢納表に記載されているプエブロはメヒカに貢納を納めてい

たプエブロであるという通説的な解釈がなされているが、これは正しくない。例をあげれば、第一八地区テメクアイルコ地区のオスマは既述のように要塞のあったプエブロであり、その住民には貢納が課せられてはいなかった。Codice Mendocino, folio 20, 21 v. 22r のプエブロを表わす絵文字をローマ字化した部分に "Calpixque" "Pueblo" と付加されている事実を尊重すれば、これらのプエブロにカルピスケが駐在し、周囲の地区の貢納徴収に従事していたと解釈すべきであろう。

④ 本稿では、ハーローの比定を基礎とし、それ以後の研究をもとに若干の補正を加えた。特にハーローの地図では、第二カ、三〇地区のプエブロの位置が大きくちがっていたので大幅に修正した。

Barlow, op. cit., Gerhard, Peter, *A guide to the Historical Geography of New Spain*, Cambridge, 1972.

Atlas-nuevo atlas porrita de la republica mexicana, México, 1972.

⑤ Chimalpahin, op. cit., p. 232, Codice Aubin, p. 79.

前者が一五二一年、後者が一五二二年の出来事としていえる。Anderson, E. and R. H. Barlow, "The Maize Tribute of Moctezuma's Empire", *Annals of the Missouri Botanical Garden*, vol. 30, (1943), pp. 413-21.

⑥ Chimalpahin, op. cit., p. 233.

この年、チヌコ王ネサワルビルが死去し、メヒコ領主の介入により、カカチチン Cacatzin が即位した。

⑦ この記録は三都市に貢納するプエブロとして約三四〇の地名をあげている。そのプエブロの分布は、現在のミラクルス、オアハカ、ケレコ、チapas およびプエブラ州に特に濃密であり、メヒコ、イダルゴ、モレロス州にはまったくいって要い。貢納表のプエブロと重なるプエブロが八〇弱みられる。

Gibson, op. cit., (三章注⑨) p. 382, fig. 2.

⑧ 第三章一節参照

⑨ Duran, op. cit., pp. 383-89, Sahagún, op. cit., Tomo III, p. 19, この時、ホナチカはアモラン Ayotlan を武力によって征服している。

⑩ たとえば、トラスカラは南のテペアカ、オリサバ地方、北のオルメカ系のサカテカ、トラトラウキティベカ地方と同盟友好関係にあり、更にメヒコ湾岸沿にクエトラストラランからタバスコ、カンペチエという地方とも交易によつて密接な関係があった。

Munoz Camargo, op. cit., pp. 105-08.

⑪ Cortés, op. cit., p. 13, Diaz del Castillo, op. cit., pp. 40-41.

⑫ このプエブロの住民はナワトル語系に属し、周囲のチヌコ、あるいはチヌカ語系のプエブロを支配していたとみられる。

⑬ Barlow, op. cit., pp. 103, 111, Dahlgren de Jordan, op. cit., p. 206.

この地域のプエブロは、メヒコの領主と血縁関係にある人を領主とつづいた。恐らく派遣された統治者が定着し、代々領主権を相続してつづいたのではないかとと思われる。第四章一節参照。

⑭ Motolinia, Fray Toribio, *History of the Indians of New Spain*, West Port, 1950, pp. 89-90.

Zorita, op. cit., p. 113.

⑮ Duran, op. cit., pp. 482-83.

古代メキシコの暦によれば、五二二年が一つの「世紀」で、Ce-Tochtili (一の鬼) から始まり Matlactomei Calli (二三の家) で終わっていた。そして Ce-Tochtili の翌年 Ome Acatl (二の芦) に新しい火の儀式を、大量の犠牲奉納で挙行していた。一五〇七年からは、第八世紀になる。

- ① ソリタは誤ってテムフカを加えてゐる。
- ② Davies, Claude N. B., *Los Señorios Independientes del Imperio Azteca*, México, 1968.
- ③ Stanislawski, Dan, "Tarascan Political Geography", *American Anthropologist*, vol. 49 (1947), pp. 46-55.
- ④ マクス・II世時代は Tlaximaloyan, Acambato など、チョマカン東部に侵功したものの大敗北を喫したという伝承があるが、事実かどうかは不明である。
- ⑤ Muñoz Camargo, op. cit., pp. 126-27.
- ⑥ 註③参照
- ⑦ このためスペイン人到着時にトラスカラ人は木綿製の服、塩の欠乏に悩まされた。
- ⑧ Cortés, op. cit., p. 16.
- ⑨ Davies, op. cit., pp. 135-39.
- ⑩ Ibid., pp. 145-50.
- ⑪ Ibid., pp. 43-44.
- ⑫ この一五一六年チヌコ領主継承争ひに敗北した Ixtlixóchitl は亡命先をメマチャランに選べたため、伝統的の反メソカの怒りをあつたのである。
- ⑬ Chimalpahin, op. cit., p. 65, Lehmann, op. cit., S. 49.
- ⑭ Sahagún, op. cit. Tomo III, pp. 238-41.
- ⑮ Dahlgren, op. cit., p. 147-49.
- ⑯ Davies, op. cit., pp. 194-96.
- ⑰ Ibid., p. 220, Sahagún, op. cit., Tomo III, pp. 28-30.
- ⑱ Díaz del Castillo, op. cit., pp. 94, 104.
- ⑲ Zantwijk, op. cit.
- ⑳ Idem.
- ㉑ Spores, Ronald, "The Zapotec and Mixtec at Spanish Contact", *Handbook of Middle American Indians*, vol. 3, (1965), pp. 962-87.
- ㉒ マーティン、一四九五年の Tzapotlan 征服と Teotzapotlan の没服と解釈しているが、ナラチクイマロ地区は Zapotlan であり、一四九五年の征服が正確であるかは不明である。
- ㉓ Selser, "Les ruines de Mitla", op. cit., Bd. II, S. 470-81.
- ㉔ Paddock, Paul, "Mixtec Ethnohistory and Monte Alban V", *Ancient Oaxaca*, Stanford, 1966, pp. 367-85.
- ㉕ Spores, op. cit.
- ㉖ Dibble and Anderson, op. cit., Book 8, p. 51.
- ㉗ Chimalpahin は Aztecaico Tula など、リコトがメソカギンとみられる。
- ㉘ Chimalpahin, op. cit., pp. 58, 60.
- ㉙ インン地区は本来貴族表の一地区であり、なかまはなごころと説かれる。
- ㉚ Borah, Woodrow and S. F. Cook, *The aboriginal population of central Mexico on the eve of the Spanish conquest*, Ibero Americana No. 45, Berkeley and Los Angeles, 1963, pp. 35-39.
- ㉛ 一五一九年の領土の拡大は Codice Chimalpopoca に記述されている。メソコ盆地内のメソコの領主権の推移について Gibson, Charles, *The Aztecs under Spanish Rule-A History of the Indians of the Valley of Mexico, 1519-1810*, Stanford, 1964, pp. 34-44, 参照。

六 おわりに

コディセは屏風絵の如く、左から右へと各一葉を展開する。征服記の一葉自体は、メヒカの拡大過程の一断面を表わすだけである。もとより、その一断面の復原すら、他史料との相互比較、考古学的裏付けという、一九世紀以来のメヒカニストによる研究成果の蓄積にも拘らず、未だ容易な作業ではない。本稿はメヒカの軍事的拡張の勢いに、ひきずられた感がしないでもない。スペイン人到着時においてメヒカがこうして拡大した支配領域を、いかに統合していったかについては、征服記自体は明確には物語らない。それについては、貢納表の分析を必要とする。メヒカの権力の中心からの隔りによって、「帝国」の領域統治が質的な差をもっていたことが、貢納体系ではより明確となると考えられる。それらについては別稿で論じることにはしたい。

The Process of the Formation of the "Aztec Empire"

—Essay based on native Sources—

by

Munehiro Kobayashi

Among the Codices, called *Xiuhamatl*, which describe the history of mexican natives on the amate paper, we have a chronicle called Codice Mendocino. It enumerates pueblos conquered by *Huey-tlatoani*, supreme rulers of the *Culhua-Mexica*, dominant tribe of the "Aztec Empire". According to the chronicle, the movement of the conquest is divided into four periods.

The first is a period of the mercenery of *Tepanecas*, and the second is that of the establishment of the leadership of the Triple-Alliance in the Mexican Basin. After these periods the Mexica pushed into the Tierra Calientes. This military expansion had been very violent throughout the third period when they seized the important places along the trade routes. In the fourth period, they tried to bring the centres of valuable products (i. e. cacao, gold, feather etc.) under their direct control.

They administrated not only by stationing tribute-collectors called *Calpixque* at many places (=about 380), but also by dispatching the governors, *Tecuhlli*, to the important places. The military fortresses in the strategic places commanded the distant conquered regions by taking advantage of their old political relations. But on account of the undeveloped communication system, these military fortresses could not supress the conflicts among pueblos in the distant regions, and the political anarchy arose in the "Aztec Empire".